

新刊紹介

大庭脩編著『木簡—古代からのメッセージ—』

丸山裕美子

編著者大庭脩氏には、すでに本書と同じく一般向けの『木簡』概説書である『木簡』（学生社、一九七九年）と『木簡学入門』（講談社学術文庫、一九八四年）の著書がある。前二書は、一九七九年の木簡学会の発足に結実する日本史における「木簡学」の萌芽に対し、東洋史の立場で長年木簡に親しんできた大庭氏が、木簡全般についての入門書として著されたもので、いきおい氏が専門とする中国の木簡についての記述が中心であった。今回、日本史の研究者で、しかも奈良国立文化財研究所で実際に木簡の発掘・整理・解説に携わっている館野和己氏というパートナーを得て、中国の木簡と日本の木簡との概説が一書にまとまったことは喜ぶべきことである。

本書は中国編と日本編との二部構成になっているが、その前に編著者による導入部「歴史の証人—木簡」が置かれ、文献ではわからない日常生活の細部を明らかにする木簡研究の面白さと、歴史の枠組みを大きく変えることはない木簡研究の限界とを指摘する。

第一部は「中国の木簡と竹簡」。まずⅠ「中国木簡の特殊性」（大庭）で、木簡に関わるさまざまな漢字の語義の説明を織り交ぜながら、木簡の形状と用途についての解説を手際よく行う。ついで出土

木簡を、発掘される場所から、Ⅱ「フィールドの木簡」（大庭）とⅢ「墓葬の木簡」（大庭）とに分けて解説する。Ⅱでは、中央アジア探検の軌跡とともに敦煌漢簡、居延漢簡、尼雅晋簡などの出土と研究状況が語られる。Ⅲでは墓葬の木簡を書籍、副葬品リスト「遺策」、文書・帳簿に分類した上で、雲夢秦簡、武威漢簡、銀雀山漢簡などを紹介し、さらに最新のトピックスとして、江蘇省青海県尹湾出土の地方行政を示す漢簡や長沙走馬楼の古井戸出土の三国呉の木簡などの情報を提供する。Ⅳ「木簡から漢代の政治と生活を読む」においては、「辺境警備の行政機構」（鶴飼昌男）と「辺境防衛のなかでの生活」（門田明）で、漢代の対匈奴防衛線の候官（軍事拠点）と烽隧（見張り台）で繰り広げられる政治と人々の生活とが、居延・敦煌漢簡から生き生きと復元される。各種帳簿類から、辺境での俸給、人事や上計制度が、文書類から地方行政の実態が、また下級官人の読み書きレベルや休暇、病氣、暦による占いなど生活の断面が鮮やかに描かれている。Ⅴ「中国木簡研究の今後」（大庭）では、発掘担当者による写真と釈文の迅速な発表が望まれること、外国人研究者として公表された木簡を利用して研究する場合の心構え、木簡の保存の問題に触れて締めくくる。

第二部は「日本の木簡」。まずⅠ「日本木簡の特殊性」（館野）で、長屋王家木簡などの最新の出土木簡を例にとりながら、木簡の史料としての性格や用法についての解説を丁寧に行う。ついで出土遺跡

ごとに、Ⅱ「都城遺跡出土の木簡」(館野)・Ⅲ「寺院遺跡出土の木簡」(鈴木景二)・Ⅳ「地方官衙遺跡出土の木簡」(鴛森浩幸)に分けて解説する。Ⅱ～Ⅳは木簡学会編『日本古代木簡選』(岩波書店、一九九〇年)の「改訂増補ダイジェスト版」といったところ。取り上げられた遺跡は三八カ所、その中には木簡選に入れられなかった橘寺や大安寺なども含まれ、また木簡選以後の成果、具体的には『木簡研究』一三号以下で報告された紫香楽宮跡、屋代遺跡群、八幡林遺跡、荒田目条里遺跡、長登銅山跡、袴狭遺跡など近年注目を集めた遺跡が網羅されている。木簡の種類も文書、付札・荷札、習書がほどよく配置され、封緘木簡や画指木簡、呪符木簡など木簡の多様性にも注意が払われ、一九九七年時点での日本木簡研究の水準を知ることができる。Ⅴ「日本木簡研究の今後」(館野)では、歴史学だけでなく他分野との共同研究の重要性、文字情報だけでない木簡の作成から廃棄までの観察の必要性を指摘して締めくくる。

散りばめられたコラムも、例えば榎山明「刻歯簡牘初探」(『木簡研究』一七、一九九五年)に基づく「刻歯のある木簡」などは、木簡学会の会員諸氏には周知のことでも、おそらく一般には知られていない興味深い事例であろう。巻末に「木簡小事典」を中国編(吉村昌之)と日本編(佐藤直子・館野)に分けて載せ、本文で触れられていない包山楚簡なども扱っており、参考文献も付いて有益である。

専門用語を噛み砕いて平易に記述し、しかも注が付いている。事

例は的確に集成され、形態情報もきっちり折り込まれている。図版も多く、写真は鮮明。釈文は適宜読み下し、必要に応じて現代語訳も付されており、原文の文字が些か小さすぎる箇所もあるが、全般に心配りのきいた啓蒙書としての側面と、専門家の要求にも堪える学術書としての側面とを併せ持っているといえよう。

ただ第一部と第二部とは一七〇頁ずつ均等に頁が割かれているが、完全に没交渉で、あたかも二冊の本を一冊にした取り合わせ本のような印象を与える。読者は一つの皿で二つの異なった料理―現時点での最高の素材で調理された―を味わうぜいたくを楽しむべきかもしれないが、ある意味で現在の木簡学界の問題と限界を示しているようにも感じられる。評者は日本史を専攻しているが、東洋史の池田温先生を中心とする研究会で、雲夢秦簡の「日書」や張家山漢簡の「奏讞書」、今は龍崗秦簡の報告をかなり辛抱して聴いており、日本と中国の木簡に大きな隔たりのあることは承知している。けれども、今後は新たな出土木簡の事例を加えるだけでなく、日本と中国の木簡を繋ぐ存在として朝鮮半島の木簡とか、中国の木簡でも漢簡ではなく、より日本の木簡に近いとされる魏晋の木簡をも取り上げた、次の段階の『木簡』書が出現する日を楽しみに待ちたいと思う。ともあれ漢簡研究の第一人者である編著者の木簡「伝道者(Evangelist)」としての自負と使命感とが伝わってくる一冊である。

(一九九八年二月大修館書店刊、A5版、三七六頁、本体四〇〇〇円)